野村生涯教育だより

No. 427

発行所
公益財団法人 野村生涯教育センター
東京都渋谷区代々木 1-47-13 〒151-0053
TEL 03-3320-1861　FAX 03-3320-0360
URL www.nomuracenter.or.jp

(公財)野村生涯教育センターの
シンボルマーク
[n] は、名称「Nomura」と、
基本理念「自然観＝Nature」の
頭文字を表している。

もくじ

● コロナ禍での活動を通して　幼児教育部　愛知連絡所
● 学ぶよろこび

城峯山と冬桜

コロナ禍での活動を通して

幼児教育部

毎年十月開催の「秋の大運動会」は、幼児教育部が主体となり、青年部、東京近県をはじめ、静岡、群馬、山梨等から参加者が集まり、近年では乳幼児から高齢層まで二〇〇名近くが一堂に会する行事となっている。

しかし、今年は新型コロナウイルス感染症拡大とそれによる社会状況に鑑み、本部から「今どういった状況下にあるのか、一つひとつの行事の意味合いを改めて考え、自分たちの動機を問い直すこと」と指針が出される中、幼児部の母親たちは「秋の大運動会」についても、コロナ禍にあっては例年のような規模での開催は難しいが、子どもたちのためにどう考えることが大事なのかと話し合っていた。運動会恒例の演目に修了生と家族による組体操があるが、修了生のSちゃんが「私の時はなかった」と思わせるわけにはいかないことと、子どもたち全員が「やったぁ」と思えるプログラムはと考え「お遊戯と組体操」を皆さんに見ていただきたいと考えた。そのことを本部に通し、了承を得た。

本部幼児教育部に通う近県在住のメンバーの中には、コロナ禍で東京・代々木に通うことを自粛している家庭もあったが、運動会についてどう考えるか話し合うなかで、夫婦で相談し、子どもの気持ちを考え、運動会に参加することになった。Mさんは、三女を連れて久しぶりにセンター本部へ行くことになり、母娘共に仲間との久々の再会を楽しみにしていた。

そして十一月十一日（水）、きめ細かな感染防止対策を取り、当センター第二研修会館で、理事長はじめ理事他を迎え、事務局、東京支部のメンバーが観客となり、幼児教育部の子どもたちと父母による発表が行われた。

幼児教育部責任者の生形由紀さんの挨拶の後、子どもたちによるお遊戯が始まった。『ドンスカパンパンおうえんだん』の曲に合わせ、母親たちが手作りした黒のビニール袋製の学ランを着て、鉢巻を絞め、たすきを掛け、ダンスを披露した。

一歳の幼児たちも音楽に合わせて自分のできる動きで一生懸命踊っていた。五歳のI君は練習の時「踊りたくない」と言ってやめてしまったことから、母親のOさんは息子にきちんとやらせたくなり、何度も注意をしていた。その様子を見た先輩の母親たちは「私たちもそうだったからOさんの気持ちはわかるけど、I君には踊りたくない理由が何かあると思うよ」と声をかけた。Oさんはみんなと同じように踊って欲しいと思っていたが、先輩の声かけでI君に踊らない理由を聞いてみた。「疲れた」との返事にOさんは「そうだったのか」と納得し息子を見守ってみようと思えた。ありのままのI君を受け止め臨んだ本番では、I君は最後まで堂々と踊りきった。

修了生による組体操では、父親が仕事で参加できなかったSちゃんが、母親、幼児部の父母、事務局の有志のメンバーたちの協力のもと、一緒に五つの技に挑戦した。緊張した面持ちのSちゃんは一つひとつ丁寧に技を決め、観客席から大きな拍手が湧いた。

最後に理事長は「こうして子どもたちがお遊戯、組体操の発表ができ、皆さんに見ていただけたことはほんとうに良かったですし、短くても貴重な時間だったと思います。運動会ができなかったのはとても残念ですが、コロナ禍という条件のなかで、何ができるか母親たちが必死に考え、工夫を凝らしたこと、また、今日を迎えるまで、足もとの家庭や仲間との関係で出てきた問題を課題にし、夫婦間でもよく話し合う機会にできたことが大事で、そのことが子どもたちの成長にも繋がっていくと思います。

日々のなかでも感じていましたが、修了生のSちゃんは修了生らしく、お姉さんになったと感心しました。また、お遊戯をしている子どもたちそれぞれの個性が光って見えました。お母さんの後ろに隠れていた子も、引っ込み思案の個性が生かされるような方向に行くかは大人の側の関わり次第だと思います。子どもたちの姿を見て、踊ってほしいと親の心は自分の価値観の中で揺れ動いたり、ハラハラしているかもしれませんが、その見方を自分の課題にし、その子に備わる唯一無二の個性をありのまま受け止め、そのことで踊らないことが気になったら親の課題にしてほしいと思います」と締め括った。

帰宅後、幼児部の各家庭では子どもたちが家族に今日の発表会のことを話し、父親にお遊戯を踊って見せた子もいた。

Jさんは、次女がJさんに隠れて踊らなかったことと、理事長の「子どもの個性をありのままに見て、大事にすることを言っていただいた」と夫に話すと「ほんとうにそうだね」と、夫婦で共有することができた。

Mさんは、夫から「君の顔がセンターに行く前とぜんぜん違うね。仲間と直接話せてよかったね」と言われ、理事長はじめ皆さんに久しぶりに挨拶ができ、幼児部の仲間との再会が嬉しくて涙が出そうになったこと、また娘も喜んでいたことを話すと、夫は驚いた様子で「いいなぁ。僕は人に会って涙が出るほど感激したことがあったかな？　幼児部で親子一緒に毎日

過ごしてきたからかもしれないね」と言い、こうした関係を持たせてもらえることが貴重でありがたいと夫婦で話し合った。

また、Wさんも久しぶりに長男を連れて参加する予定だったが、当日の朝に長男が発熱し、欠席となった。Wさんはとても落ち込んだが、仲間から「残念だったけど、来られなかったことをマイナスに受け止めるのではなく、自分の気持ちと向き合うきっかけにしていこうね」と言ってもらい、このことから収穫にしていこうと思えた。

幼児教育部の母親たちは、行事を通して、子どもの姿から引き出される自分の価値観と向き合い、そしてその子の個性をありのままに見ることの大事さを学べたことが感謝となった。

また、一人ひとりが、コロナ禍という触れ合う条件から、形は変えても、変えてはならない大事な価値とは何かを考え、新たな形を生み出すことの大事さを実感した行事となった。

愛知連絡所

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、東京の本部はもとより全国の各支部・連絡所でも厳しく感染予防対策を取り地域活動を行っている。そうした状況下、豊橋市民センターから毎年主催の『オレンジフェスタ』開催の知らせが愛知連絡所責任者の東純子さんに届いた。このイベントは市民活動団体同士の交流と、その活動を広く周知することを目的とし、愛知連絡所もこれまでに九回参加している。

愛知連絡所のスタッフは、コロナ禍なだけに参加をどう考えたらいいかを話し合った。中心になるメンバーの中には、介護職に就いている、舅を介護している、また自身が高齢者であるといった事情があり、不特定多数が集まる催しへの参加は見送ろうとの結論に至り、本部の研修・地域担当に伝えた。その報を受けた金子理事長からの「その結論でもいいのですが、これまで参加することを通して、市行政の方や地域の方たちと交流を重ねる良い機会にしてきたことはどのように考えていますか?」との投げかけが研修・地域担当からスタッフに伝えられた。東さんは、改めてメンバーたちの不安を担当に話すと、主催者にその不安も感染予防対策についても伺ってみてはどうかと助言を受けた。東さんたちは、恐れるだけだったことが反省になり、この経緯と思いをそのまま主催者に伝えると「そうでしょうね。ではまず実行委員会に参加し、それからご判断されたらどうですか」と言ってもらった。東さんはこのことを夫に話すと「今まで参加を重ね、主催者側とも関係を築いてきたのに相談もせずに『自分たちはやりません』はないのでは」と言われ、〝共に〟が無かったことを反省し、実行委員会に参加した。

主催者から「今、市民団体は活動自粛を余儀なくされ、仲間とも会えず、行事も中止となりストレスを抱えている。それだけにこういった出会いの場が必要だと考えた。今までやってきたものを大事にしたい」と聞き、東さんは理事長の「このコロナ禍で大切なことは、主体的に考え、行動すること」との指針の下に仲間と学んでいることをありがたいと思った。その思いをメンバーと共有し、自分たちも主体的に予防策を取り、参加することを決めた。密を避け、より良い紹介をするにはと考え、口頭での説明を避け、キャプションを読めばわかるよう、より詳しいものを作成した。理事から「皆さんの情熱は伝わってきました。それなだけに、何が大切なメッセージか、その中身を端的に表すことですよ」と助言を受け、ギリギリまで修正を重ね展示準備を行った。

当日、キャプションにある「発足当初からすべての活動は、他の財源に依存せず、会員会費と自分たちの寄金で賄われ、物心共のボランティア精神でこれまで活動を継続している」ことを読まれたある行政の方は「他に依存すると脆いですから、依存せず活動されてきたことはとても素晴らしい。ここまでできるのは強い理念があるからですね」と語った。センターの精神が伝わった喜びと共に、メンバー自らもこの活動の価値を再確認した。また、毎年共に参加している他団体の方とも再会を喜び、交流を深めた。

その後行なった十月の愛知講座では、これまで長く交流を続けていたが、なかなか参加が叶わなかった中学校の校長先生が初めて参加され「皆さんが、この学びに誇りを持たれていると感じた。毎年一年かけて、同じカリキュラムで学ぶということが素晴らしい。今、新しいものを取り入れることばかりに目がいってしまうが、昔から変わらない大事なものを価値としていることに感動した」と感想を述べられた。

愛知連絡所のメンバーは、関わりのなかでこれまでの繋がりを大切にしたいと気持ちが変わったことで、貴重な出会いに繋がったことを大事な収穫として確認した。

学ぶよろこび

岡山支部　水川恵津子

私の住む倉敷市真備町は二年前の七月、西日本豪雨災害で甚大な被害を受けました。東京で全国講座を受講し、岡山に戻って間もなくのことでした。自宅二階まで浸水した時、もう駄目かもしれないと思い、姉に電話をかけました。「とにかく生きるのよ」と言われて、何とか生きようと必死になり、警察に救助を求めると「部屋の高いところに足場を組んで息をしてください」と言われました。二階の押し入れの天井板が開くことを思い出し、必死に夫と上がりました。岡山支部の担当理事補佐に電話をかけ、状況を伝えると直ぐに理事長、理事に繋げてくださったと連絡が入り、心が落ち着きました。

隣にいる夫の顔を見て「死ぬときは一緒じゃな」と言うと「まだ死なんで。あんたを必ず守る」と言ってくれ、助けが来ることを信じ必死に耐えました。その後、家の前を救命ボートが通りかかり、私たちは助けてもらうことができました。

命は助かったものの、夫が定年を迎え、やっと一息ついたところで、家も何もかも失い、生きる気力を失いかけました。

被災して二週間後、支部の責任者から「岡山講座があるけど、どうする?」と投げかけがありましたが「とても無理です」と伝えました。その後、責任者から再度電話をもらい、私の様子を聞いた理事がとても心配してくださっていること、また「心の奥底の気持ちをよく見てください」と言っていただいたと伝えてくれました。

その頃は姉の家に避難していましたが、夜は眠れず、何でこんなことになったのかと夫と二人で泣いてばかりいました。朝になると仕方なく、泥だらけになった自宅の片づけに行き、ちょっとしたことにイライラして、夫と喧嘩をしていました。「このままでは前向きにはなれない。意識を変えたい」と思っている自分の本音に気づき、夫に「講座に行かせて欲しい」と頼むと「一緒に行くよ」と言ってくれました。

会場に着くと、支部の皆さんが「無事でよかった」と声をかけてくださいました。また、皆さんに辛い気持ちを受け止めてもらい、ほんとうに嬉しかったです。東京の本部事務局から講師の方が来られていて、皆さんが心配してくださっていると伺いました。そして『野村生涯教育の人間観』を学び、最も大事な命が助かったのだから、何とか夫と共に頑張ろうという気持ちになれました。それから毎月の講座やミーティングの度に苦しい気持ちを聞いてもらい、自分の気持ちを夫にありのまま出し、夫の気持ちも聞かせてもらう努力が大事だと教えてもらいました。お互いに前を向こうとしている時に、私が「辛い」と言ったら夫は気を悪くするに違いないと思っていましたが、思い切って「何をやっても虚しい」と夫に本音を話すと「僕もそう思う。おもしろうない」と話してくれて、夫も同じ気持ちだったのだと、ホッとしました。そうやって夫婦で繋がることで、気持ちが安定し、また真備町に戻って生活を再建しようというまでの気力を復活させていただくことができました。

そして、今年度から再び全国講座を受講させていただくことになりました。オンラインで行われた七月の開講で、金子理事長が講義に立たれ「一人ひとりの意識が社会を作っている。自分本位の見方を是正していくことが、社会の是正となる」とおっしゃいました。質疑応答で、私は「被災した当時は命があることがありがたいと思っていたのに、毎日夫と一緒にいると衝突ばかりしてしまう。夫が『Tシャツを洗う時は裏返しにしてネットに入れなさい』と言ってくるので、いちいちうるさいと思ってしまう。この自分の意識をどう変えていけばいいのか」と質問しました。理事長から「定年後、夫婦で一緒に過ごす時間が長くなり、お互いに見えなかったものが見えてくるということはあると思い

ます。そのことから何を自分の課題にしたらいいのかを考えていくことと、『いちいち』の『一』を大事にすることではないかと思います。ご主人のおっしゃることを聞こうと努力することが自分自身の自己中心性を取っていくことに繋がるのですよ」と言っていただきました。

この指導を受け自分をふり返ると、夫がうるさいから仕方なく行動だけ変えようとしていて、夫が何を言ってくれているかを聞こうとしていないことに気がつきました。そして、夫は物を大切に扱うようにと言っているのだとわかりました。夫が在職中の頃は、私のやり方でやりたいように家事をしてきたので、今、夫の考えを聞くことが、私の自己中心性を取っていくことに繋がるのだと思えました。それを課題にして生活してみると、夫の『一』が聞けた時、自分自身が楽になりました。それから三カ月経ち、今では自ら進んで夫の言ってくれたやり方をしている自分に驚きます。

十月、岡山講座の講師の役をいただき、水害からの二年をふり返りました。センターの皆さんをはじめ、どれほどたくさんの人に関わりをいただき、思っていただいてきたかわかりません。また、ほんとうに辛かったけれど、なぜ頑張れたかを思った時、ふと今は亡き両親のことが浮かびました。二十歳で終戦を迎えた父は、山を開墾し、何も無いところに家を建て、田畑を耕し、母と二人で姉と私を育ててくれました。その厳しい条件の中で生き抜く強靭な精神を受け渡してもらっているのだと思え、きっと「頑張れよ」と支えてくれたのだと、両親との繋がりを感じました。

野村生涯教育を学び三十年が経ちます。子どもがいないことが人生苦だったことから学び始め「今在ることを大事に」とずっと言い続けていただいてきました。たくさんの関わりをいただき、水害を通して夫との絆を深めさせていただいていること、目に見えないものにどれだけ支えられているかに目を啓かせていただいたことが、今、ほんとうに感謝です。

真備町に帰って、もうすぐ一年になります。この学びに出会えたこと、命があること、日常があることに感謝し、日々出会う条件から自己を知り、これからも自己変革に挑戦していきたいと思います。

学ぶよろこび

茨城連絡所責任者　澤村智子

私は二十六年前にこの学びに出会い、仕事をしながら土曜講座で学んでいました。五年前に定年を迎え、その後、全国講座で学ぶようになりました。

そして今年度より茨城連絡所の責任者の役をいただきました。責任者として何をどうしたらよいのかわからず不安とプレッシャーで一杯でした。例年、新年度に向けた組織体制の発表と、それへの心構えの話し合いが持たれてきた三月の全国講座生勉強会と創立記念日が新型コロナウイルス感染拡大のため中止となりました。その時、金子理事長は全国講座生全員に宛てた書簡に、創立以来初めて創立記念式を行わない決断は苦渋のものであったことと「何のために学びたいと思っているのかを自分に問う機会にしてほしい」と書かれていました。自分のこととして受け止めましたが、責任者としての不安は残っていました。そうした中、創設者の存命中最後のフォーラムとなった二〇〇二年開催の「第八回生涯教育国際フォーラム」の記録集を読み、創設者の「組織を広げようとは思わないのです。人間を考えるのです。人間が幸せになってくれればいいのです。精神を繋げていってくだされば いいのです」との言葉に触れ「あぁ、自分がセンターの精神を受け継げばいいんだ」と思え、それを皆で共有していくことだと考えました。悩むことはなくなりましたが、責任者のすることは本当にたくさんありました。

そのような中、金子理事長から新しく責任者になったことをご心配くださるお電話をいただき、戸惑う気持ちをお話しすると「初めてなのだからわからなくて当然です。何でも前責任者に聞いていくことが大事ですよ」と言っていただきました。しかし私は前責任者のMさんに対し以前から批判があり、事務の引継ぎでさえも聞きたくない気持ちがあることを話すと「どんな批判があるのか自分の気持ちをよく見てください」と言っていただき、改めてMさんに対する気持ちを探りました。

二十数年前、ある事情からMさんのご家族のお手伝いを一年間したことを、Mさんから感謝されていないように感じていることを、昨年、茨城勉強会の提言原稿を研修・地域担当に見ていただくなかで引き出してもらいました。その後Mさんと話し合いましたが、未だに納得できずにいることが批判に繋がっていることが見えてきました。それを担当に話すと「あなたが善意で人さまを思い、自ら申し出てさせてもらえたことは、ご両親にその資質をいただいたからでしょう」と言われました。

その頃、母が発熱し、原因がわからず二カ月間病院を転々としていました。実家まで遠く、コロナ禍で夫から外出を控えるように言われているため、弟に母のことを任せきりにしていました。弟は病気の叔母の世話もしていて、叔母の入院と母の診察日が重なった時に「お母さんを病院に連れて行ってほしい」と言われましたが、それができなかったので、弟から責められていると思っていました。担当から「弟さんの大変さや気持ちをわかろうとしていますか？　弟さんには感謝しかありませんよ。相手の思いを受け止めようとせず、自分の思い通りにならないと批判していくものをあなたに感じます」と言われ、本当にそうだと思いました。自分の側の見方しかなかったことが反省になり、しばらくして母の発熱の原因がわかり治療をすることができました。

このことから「人の思いを受け止めない」とMさんに見ていたことは自分の姿だったと気づくことができました。Mさんにそのことを話すとMさんの声も明るくなり、思いを受け止めてくれたと感じ、私の凝り固まった心が溶けていきました。

今まで多くの関わりをいただき、自己変革をさせてもらっていることに感謝し、これからも学び続けていきたいと思います。